



第13回 松江赤十字病院 地域連携サイエンス 漢方 処方研修会に参加して



総合診療内科部長
岩崎 伸治

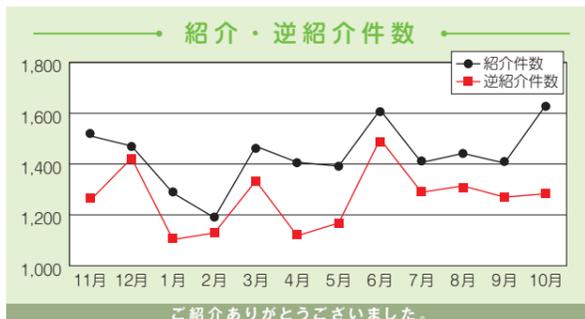
12月2日に3年ぶりに北海道の日高徳洲会病院院長の井齋偉矢（いさいひでや）先生を招いてサイエンス漢方処方研修会が院内会場参加とオンライン参加を組み合わせで開催されました。

まず、当院感染症科部長・成相昭吉先生の「コロナの時代の呼吸器ウイルス感染症と漢方」と題した講演がありました。成相先生はコロナ禍の直前に当院に赴任され、以来、新型コロナや今シーズンのインフルエンザ流行に際し陣頭に立って尽力されています。その中でエビデン

スのある麻黄湯などを積極的に使っていらっしゃいます。小児科の先生なので、小児に漢方薬を服用させるコツも教えていただきました。

井齋先生は「楽しみや希望を取り戻させようとする漢方薬 ～精神を安定させたい憂鬱を抑えたい～」という題で講演されました。抑うつ状態に半夏厚朴湯、香蘇散、芍帰調血飲、帰脾湯、加味帰脾湯の使い分けを陰陽虚実・気血水理論を使わずにわかりやすく解説されました。他、不安神経症、神経衰弱、神経性心悸亢進症、過換気症候群・パニック症、下痢型過敏性腸症候群、片頭痛、緊張型頭痛、線維筋痛症、咽喉頭異常感症、膀胱神経症など多岐にわたる疾患・病態に対しての漢方薬の使い方の解説は、実際に現場で治療をされている井齋先生ならではの。

今後も当院での定期的な講演が予定されており、弟子の一人としてもとても楽しみです。

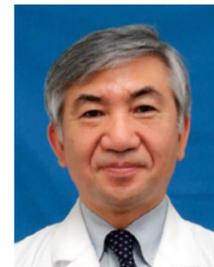


松江赤十字病院 地域医療連携課
〒690-8506 松江市母衣町200番地
TEL 0852-32-7813 FAX 0852-27-9261

れんけい だより



新年のご挨拶



院長
大居 慎治

新年明けましておめでとうございます。

新型コロナウイルス感染症が始まって4年目になります。第8波と呼ばれているこの年末年始の状況も第7波以上に悪化しており、ゆっくりと新年を寿ぐ気持ちになれない方も多かったのではないかと思います。

第7波では市中での感染が急速に拡大し、確保病床以上に収容せざるを得ない日々が続きました。県の入院調整本部や保健所による入院調整は困難となり、救急病院である当院に患者さんが集中するという事態になりました。救急や待たなしの疾患の治療を優先したため、一部の患者さんの入院や手術を延期せざるを得なくなりました。次に来られる患者さん用のベッドの確保のため、急いで退院や転院をしていただくことも必要でした。

昨年11月に転院調整のため直近の他院の病床利用状況がわかるシステムを県に要請しましたが色良いお返事はいただけず、結局保健所長をお願いをして、松江圏域の協議の場を設けていただきました。そして毎日松江市内の病院の確保病床の利用状況を保健所から通

知していただき、転院調整・受け入れが極めて効率的になりました。「由らしむべし、知らしむべからず」ではなく、「知らしめて、その後由らしむ」ではないかと思うのです。

ただ、今も新規コロナ患者が救急病院に集中している状況は変わっておらず、地域の先生方には入院が必要かどうかを見極めていただくことや退院や転院が可能になったら速やかに受け入れていただくことをお願い申し上げます。

ポストコロナへ向けてのキーワードは役割分担と医療介護の連携です。コロナの教訓そのものです。進む高齢化で入院期間が長くなりがちですが、地域の医療機関が役割分担し、介護との連携を強め、リハビリや栄養状態の改善などを含め回復期・慢性期の医療介護は地域全体で支える仕組み作りが必要です。関係者による協議の場を持ち認識を密にするとともに、住民の皆様にもご理解をいただくような機会も設けたいと思っています。

コロナが今年こそは収束し、皆様に幸多き年となりますようお祈り申し上げます。

今年もどうか宜しくお願い申し上げます。



第16回 **地域医療従事者スキルアップセミナー**

令和4年 11月5日(土)、本館6階講堂において、二次医療圏域の医療従事者向けの研修会を開催しました。当日は看護師を中心に、介護支援専門員、精神保健福祉士等、様々な職種から多数のご参加をいただきました。

内容は、第一部「口頭発表」第二部「講演」の二部構成で実施しました。

ご協力をいただいた関係者・演者の皆様、ご参加いただいた医療従事者の皆様に対し、紙面を借りお礼申し上げます。

今後も、関係の皆様と連携しながらニーズに沿った研修が出来るよう鋭意努力して参りますので、引き続きご指導・ご鞭撻の程よろしくお願いたします。



第一部 口頭発表

- ①「気持ちよく排便するためのケア」
訪問看護ステーションやすらぎ 看護師 野津 薫
- ②「松江市在宅医療・介護連携支援センターの取り組み」
松江市在宅医療・介護連携支援センター
保健師・介護支援専門員 錦織 梨紗
- ③「高齢心不全患者支援におけるACPの重要性」
松江赤十字病院 社会福祉士 瀬藤 亮太
- ④「安来第一病院 精神科訪問看護について」
安来第一病院 精神保健福祉士 津村 脩平
- ⑤「自立訓練(機能訓練)事業におけるとりくみについて」
厚生センター晴曇 作業療法士 山崎 浩和
サービス管理責任者 岩田 房子

第二部 講演 テーマ『急変の察知と対応』

- ①「急変をはやく察知することの重要性」
松江赤十字病院 救急部長 田邊 翔太
- ②「急変させないための気づき」
松江赤十字病院 救急看護認定看護師 中筋 真紀

急変を察知することの重要性

救急部長 田邊 翔太



急変とは、想定範囲を超えて患者の容態が急激に変化することです。振り返ったら突然息が止まっていたというような予期できない急変もありますが、病院における急変の60~80%には数時間前から予兆があると言われています。

この予兆を早期に察知し、適切な介入を行えば患者の生命予後は改善します。松江赤十字病院でも、2022年度から急変の予兆を察知して介入する「迅速対応システム=Rapid Response System=RRS」の本格運用を開始しました。

では、どのように急変の予兆を察知するのでしょうか。世界的には複合指標計算や人工知能を用いた研究も進んでいますが、本邦において一般的な方法はバイタルサインによる変化の認知です。その中でも、呼吸数(最も測定されることが

少ないバイタルサイン)はSpO2や脈拍・血圧よりも早期から変化すると報告されています。皆さんの施設でも呼吸数に注目した観察を行えば、急変の予兆をいち早く捉えることができるかもしれません。

最後に、急変対応ではDNAR=Do Not Attempt Resuscitationについても思いを巡らす必要があります。DNARの「蘇生をしない」という意味であり、検査や治療をしないという意味ではありません。DNARの患者さんに対しても輸血・昇圧薬・透析・人工呼吸管理を行う場合があります。DNARの解釈や濫用への懸念についてお話ししましたが、事後アンケートでの反響は大きかったです。これからより多くの議論が必要な領域と感じました。

第19回

松江赤十字病院 地域連携交流会



第19回 地域連携交流会に参加して



副院長 村田 陽子

令和4年11月16日ホテル一畑で第19回松江赤十字病院地域連携交流会が開催されました。今回も感染対策を徹底し、研修会と情報交換会のみとなりましたが、院外からは42名のご参加を頂き、院内からは医師37名を含む62名の参加でした。

内田靖地域医療連携室長の司会のもと、大居院長からの主催者挨拶、3名の新任部長挨拶と3演題の講演が行われました。

城田循環器内科部長からは、「冠動脈疾患診断におけるFFR-CTの導入」、成相感染症科部長から「コロナ・インフルエンザ同時流行下の発熱患者への初見対応を考える」、中村心臓血管外科部長から「低侵襲時代の心臓への新たなアプローチ」の講演でした。いずれも地域医療に貢献する最先端の講演で、院内参加者が聞いても興味深く、思わず見入ってしまう動画も披露されました。最後に今年4月新設のがん診療推進室について村田よりご報告いたしました。

島根県医師会会長の森本先生からは地域の基幹病院であることをあらためて自覚させていただくような励ましのメッセージをいただき、感謝申し上げます。

昨年のこの会の時には、「来年は懇親会もできるのでは」と漠然と思っていたのに、今年8月を中心としたコロナ禍第7波の強烈な洗礼を受けることになり、やっと一息と思うまもなくもう第8波にはいったようです。ますます重要となった地域医療連携をさらに発展させ、困難な問題も解決にむかうことができると信じております。

地域の先生方には今後とも一層のご指導ご鞭撻をよろしくお願申し上げます。



医療社会事業部 医療相談係長 樋野 耕平

11月16日に開催された地域連携交流会に参加させて頂きました。第1部の研修会では城田循環器内科部長、成相感染症科部長、中村心臓血管外科部長から県内で初めて導入したFFR-CTを用いた冠動脈診断、コロナ・インフルエンザ同時流行下の発熱患者への初見対応、低侵襲の心臓手術について講演がありました。社会福祉士の自分には難しいところも多く有りましたが、最新の知見や診療実績、治療の潮流に基づく説明は初めて聞きすることばかりで

新鮮な気持ちで学ばせて頂きました。当日は100名近い参加者が有りましたが、講師の良い治療を提供し、開業医の先生方と地域医療を支えるという想いが伝わる研修会であったと感じました。第2部の情報交換会では、退院支援中の患者さんの主治医の先生に御挨拶をさせて頂きました。診療を通じて考察された生活課題や今後の療養についてご助言を頂き、患者支援についても開業医の先生方と積極的に情報を共有し、共に考えることの大切さを実感しました。今後とも地域の先生方との情報共有や連携を行うことで、患者支援・退院支援の質が高められるよう努めたいと思います。今後とも宜しくお願致します。